

相模原市立青和学園

小 畑 弘 文*

——本日はお忙しいところありがとうございます。小畑校長先生から、お話を伺います。よろしくお願いします。

お願いします。

——まず、青和学園の開校までの簡単な経緯と、今のご様子を教えてください。

平成30年1月に、「青野原小・中学校における義務教育学校設立準備委員会」が設置され、青野原小・中学校を統合して義務教育学校にする準備が進められていましたが、その後、青根小・中学校を加えた4校を統合することとなり、青和学園は、令和2年度4月1日に、相模原市初の義務教育学校として開校いたしました。4月6日の開校式、始業式、入学式後は、新型コロナウイルス感染防止のために、臨時休校となりましたが、6月15日から、全学園生が一斉に登校し、教育活動が本格的にスタートしました。また、11月14日には、保護者・地域の皆様も出席される開校記念式典を実施するところです。

——「義務教育学校」として、注目される所ですね。

小学校段階に該当する1年生から6年生を前期課程、中学校段階に該当する7年生から9年生を後期課程と呼び、1年生から9年生までの義務教育段階の子どもたちが、日常的にともに学ぶ姿を見ることができます。また、学園内では、児童・生徒あるいは小学生・中学生ではなく、学園生と呼び、現在、79名が在籍し

ています。

——頂戴したお名刺に、「コミュニティ・スクール」とも書かれていますが、地域の方との関わりというところを教えてください。

学校運営協議会が設置されている学校を、コミュニティ・スクールと言いますが、現在、市内の各区に一校ずつのモデル校があり、緑区では、青和学園が指定されています。青根・青野原両地域の保護者、地域振興協議会、学識経験者などの方々が委員となっていて、学校運営の方針などを共有しながら、地域との組織的・継続的な関わりの中で、地域とともにある学校として教育活動を行っています。

——青根と青野原の小・中学校、四つの学区関係者が集って、この学校をつくり上げてきたというところでしょうか。

青根小学校と青野原小学校は、明治6年の開校で146年の歴史があり、青根中学校と青野原中学校も、昭和22年に開校し73年の歴史がありました。どの学校も、地域から親しまれ、愛されてきました。そのような学校の閉校という喪失感を味わった卒業生や地域の方々の思いにも寄り添いながら、青和学園は、地域に愛される学校、持続可能な社会の担い手となる子どもたちを育てる学校でなければならないと強く思っています。

——それぞれにPTAのような組織はあったのでしょうか。

青野原小・中学校も青根小・中学校も、青和学園開校前からそれぞれ小学校と中学校は一つ

*相模原市立青和学園校長

のPTA組織となっていました。現在、保護者の方たちとどのような組織にするか、話し合いをしているところです。コミュニティ・スクールとして、今後も、保護者の方たちによる学園を応援していただける組織になればと思っています。

——青根と青野原、関わる人たちの居住地域が広がるとともに、小学生と中学生、保護者の幅も広がったというところで、地域の方との関係の中で、うまくいっているところ、難しいところはありますか。

以前から、青根・青野原の両地域とも、保護者の方々の学校への協力体制は、とても強いものがあります。両地域の文化など、多少、違うところはあるかもしれませんが、これまでの義務教育学校設立準備委員会などでの話し合いでも、お互い理解して、学校に対して協力しているという考えの皆さんですので、とてもやりやすいです。

義務教育学校では、保護者の方々にとっても1年生から9年生までの幅広い学園生の成長の姿を一度に見られるわけですから、子育ての見通しもつくのではないかと思います。また、青根・青野原の両地域には、さまざまな豊かな資源がありますので、それらを活用して、これからも地域の皆さんの協力を仰ぎながら、教育活動を進めていきたいと思っています。

——学生たちは来年お世話になりますが、どんなことを地域の方と一緒に見ながら感じていくことになるでしょう。

4校が一つになって青和学園となりましたが、残念なことに、このままいくと子どもたちは毎年、減っていくことになります。また、交通の便が悪いなどの理由で、大人になると地域の外に出てしまう方がかなり多いです。神社の夏祭りに行く子どもたちがたくさん来ていますが、夏休みに地元に戻って来られた住民の方のお子さんなのです。まず、現在、このような

状況にあるということを知っていただきたいと思います。

来年度から、この地域の魅力を学生の皆さんと子どもたちと一緒に再発見して、この地域がこれからも持続可能となるように、学生の皆さんと協力しながら地域の魅力を発信して、大人になってもこの地域に留まる人を増やす、あるいは来ていただく方が増えるようになればと考えています。また、コロナ禍で、テレワークの可能性もこれから広がっていくと思いますので、この地域で仕事もできるということも紹介できればいいですね。

1年生から9年生までの幅広い子どもたちと学生の皆さんと一緒にフィールドワークなどをしながら、さまざまな地域資源を見いだし、地域を紹介するマップやガイドブックができればいいと思います。子どもたちも、きっと、学生さんたちとの活動を楽しみにするのではないのでしょうか。

——小学1年生からみたら、大学生という、なかなか日頃、接することもないところですよね。

普段から異学年の交流をしていますが、学園生以外の大人、若い方々との交流も、子どもたちの成長にとってもいい影響を与えたいと思います。また、学生の皆さんにとっても、ご自身が子どもたちと関わることで、新たな気付き、発見があると思います。学習以外の面でも、お互いに人間的な成長も期待できるのではないかと考えていますので、ぜひご協力をお願いしたいと思います。

——子どもたちとは、授業で関わるようになりますか。あるいは土日等、授業外にも関わりますか。

生活科、総合的な学習の時間、あるいは社会科などの授業で、地域を探索する、地域の方々と協働作業などをすることがあります。そこに一緒に加わっていただくので、子どもたちや地

域の方々との関わりが出てくると思います。地域を歩いて回ったり、地域の方々からさまざまな話を聞いたりしながら、より地域を深く知る活動を一緒にできればと考えています。また、スクールバスがありますので、地域内を移動するときには子どもたちと一緒に乗って、行動できるのではないかと思います。もちろん、校内での授業でも関わりが出てくると思います。基本的には、学園生との協働活動では土日は考えていません。

——学校をつくっている地域の方々との関わり方についてはどのようにお考えですか。

最初のほうで話したように、保護者・地域の皆さんが委員となっている学校運営協議会があります。現在は、コロナ禍でなかなか動きが取れませんが、来年度以降、地域学校協働本部を立ち上げる予定で、地域と学校をつなぐコーディネーターとなる地域学校協働活動推進員の候補者も既に何人かいらっしゃいます。今後、地域学校協働本部に参画していただくメンバーの中に青山学院の学生さんたちも加わっていただき、地域の皆さんと一緒にどんなコラボができるかということも楽しみです。また、地域にある事業所とのコラボもできるのではないかと思います。地域の特産物や観光資源をPRするなど地域の魅力を発信する、地域の活性化を考えるなど、学生の皆さんの創造力も期待しているところです。

——子どもたちの授業に関わるということ、学校の運営に携わる地域の方と関わるということ、学校がある地域の活性化にも関わるということ。学生たちには、さまざまな視点で考え行動することが求められるんですね。

地域の方たちに元気を与えるようなことも必要だと思います。学生や学園生が活躍することで、地域の方が刺激を受け、一緒に何かやっというような地域が活性化する動きにもつながると思いますし、あるいは、地域の特産

物などを広く周知することによって、新たな産業なども創出されるかなと考えています。広い意味では、より良い地域社会、地域の人たちの幸福な人生を創り出すということにもなるかもしれません。

——地域づくりについて、この地域にある青和学園ならではの、学生たちに期待することはありますか。

とても親しみやすい地域の皆さんです。先ほど言いましたが、今は若い方たちが、青根・青野原地域から外に出て行くことが多いのですが、学生さんたちが地域の方たちと関わることによって、地域の良さも再発見して、地域での生活を自分たちで豊かにできるのではないかと考えるようになるなど、地域の人たちも変わっていく契機になるのではないかなと思います。

また、学園生は、1年生から9年生までの教育の中で、地域の良さを知っていき、わざわざ外に出なくてもこの地域で生活していく、また、地域をより発展させていこうと考える子どもたちが、これから卒業していくと思います。そういうことも考えていくと、学生さんたちが地域へ貢献することになり、地域、学生さんたち相互にとってもいいことではないかと考えています。

——本学部の学生は、全国から来ていて、過疎といわれるような地域から来ている学生もいれば、都心から来ている学生もいて、いろいろな価値観を持った学生たちが、お世話になると思います。学校の先生がたと一緒に何かできること、先生がたにとって学生たちはどんな存在になりますか。

もちろん、私たち教員も地域に貢献しなければなりません。学生さんたちが、ここでの成功体験を得られれば、過疎の地域から来られた学生さんたちは、自分の地域に戻った際にその成功体験を生かして、地元地域の活性化につながる取り組みもできるのではないかと思います。

す。ぜひ、ここの地域をモデルとして、さまざまなことに取り組んでいただきたいと思いますし、私たちも皆さんのパートナーとして支援していきたいと思います。

——学校、あるいは学校の先生がたに還元できることがあれば。

教員も常に研修をしなければなりません。学生さんたちの若い力、考えなどから刺激を受けて、どんなことが義務教育段階で必要となるかなど考えるようになり、より良い授業ができるようになるのではないかと思います。

また、学生さんたちの姿が、学園生たちにとって刺激となり、学ぶ意欲も高まっていくのではないかと思います。

——これまで青和学園の設立の経緯や地域の方との関わり方、それから学生たちに期待することなどをお話伺ってきましたが、最後に少し、今年の8月上旬に、SDGsの取り組みを青和学園としてされたということで、お話伺えますか。

もともと学園経営の柱として、地域と協働し地域教材などを活用した、SDGsの目標・課題を取り入れた生活科、総合的な学習の時間を、「Say “和” タイム」と称した時間設定をしています。8月上旬にSDGsについて学ぼうと、全学園生対象とした授業を集中的に行いました。青根小・中学校の旧校舎や青根地域で授業を行いました。子どもたちは、とても生き生きと

活動に取り組んでいました。より大きな視点で、持続可能な社会をつくるにはどうしたらいいかということについて、普段の学習がどういうことにつながっているのか、自分は何のために学習しているのか、ということと関連付けながら、子どもたちは考えるようになりました。

学生さんたちも学園生とともにSDGsの取り組みに加わることによって、より広い視点から、地域の活性化について考えることにつながるのではないかと思います。

——ありがとうございます。重なってしまうかもしれませんが、最後に学生たちへのメッセージをお願いできますか。

今はコロナ禍で大変な思いでいらっしゃるでしょう。でも、必ず人間はコロナ禍を克服して、皆さんもキャンパスライフを送れるようになると思います。貴重な青春時代に、青和学園の子どもたち、教職員、地域の皆さんと一緒に、教育活動に取り組むことも、皆さんの人生を豊かにすることにつながると思います。来年度から、皆さんと一緒に活動をしていくことを楽しみにしています。よろしくお願いします。

——よろしくお願いします。ありがとうございました。

ありがとうございました。

2020年9月2日 相模原市立青和学園にて
(聞き手：伊藤真木子)

